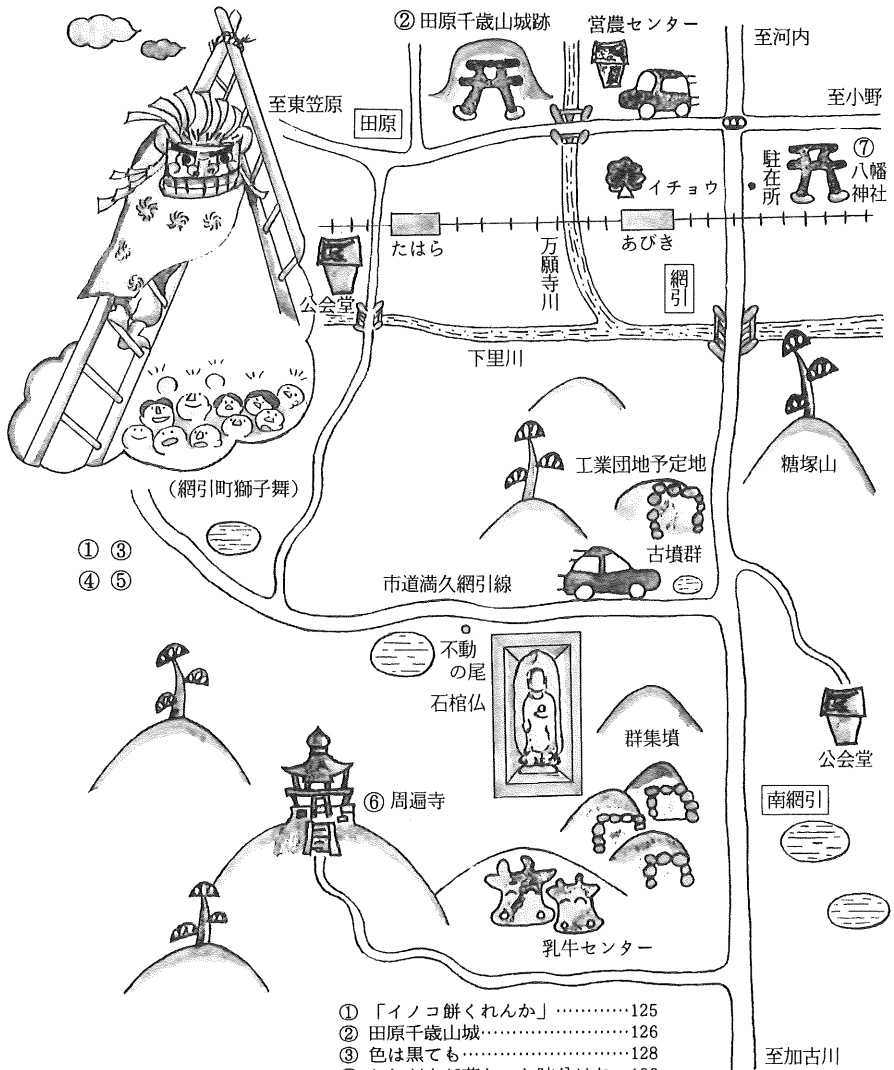


6 下鴨の里人 5.0キロメートル



- ① ③
- ④ ⑤

① 「イノコ餅くれんか」	125
② 田原千歳山城	126
③ 色は黒ても	128
④ わしがまだ若かった時分はな	129
⑤ 人かくし	131
⑥ 周遍寺縁起	131
⑦ 網引の八幡さん	132

・八幡神社網引獅子舞（市無形文化財）

明治二十年に小野市より伝わったといひ民族芸能として価値の高いものです。

・網引八幡神社能舞台

棟木札の銘により、貞享元年（一六八四）の建立が知られる奉納能楽用舞台で、市内にはもとより、県下でも古く、めずらしいものです。

・南網引群集古墳

南網引周遍寺付近には群集古墳が多く、下鴨里の盛時がしのばれます。

新村群集墳 一〇七号 古墳後期、数ヶ所石室に入られる。

周遍寺山古墳 一〇三号 古墳中期

堀山古墳群 一〇四号 古墳後期

状覚山古墳 一、二号 "

赤松尾群集墳 一〇四号 "

新池古墳 一号 "

糠塚古墳 一〇四号 "

・糠岡（糠塚山）

播磨風土記に「糠岡、右然しか号くるは、大汝命、稻を下鴨の村に春かしたまいしに、糠散りて、此の岡に飛び到りき、故糠岡という。」とある風土記の岡です。飯盛山とともに鴨国の祭事が営まれた霊地と思われます。

・周遍寺

孝徳天皇の白雉二年（六五一）、法道仙人の開基と伝えられ、山頂からの展望がすばらしい。

「イノコ餅もちくれんか」

昔、子どもの楽しみに、「イノコ」というのがあったんじや。秋の取り入れも終った十一月末の亥いの日に
する行事でろう。

「イノコ餅くれんか、くれん家やの嫁かまは鬼産うめ、蛇産じゅうめ、角つゝの生はえた子産め。」

と悪態をつきながら、一軒一軒まわっては餅をもらい歩くんじや。今のように何でも食べもんのある時代と
ちごった。昔はおやついうても何にもなかったもんやで、イノコで餅がもらえるのは、そりああ楽しみな
もんやった。

その日はどの家でも餅をついたもんや。餅はその日まで残しておいた稲穂と大根とねじくボーキというて
一にぎりほどのわらを真中でねじるようにして二つ折りにしたものを二本とをいっしょに箕みに入れて、俵わらの上
にのせて亥の神さんにおそなえしたもんじや。

亥の神さんは豊作の神さんで「今年も無事収穫できました。ありがとうございます」とお礼を言い、来
年の豊作も祈ったんじや。けつたいなことじやが、何でもこの神さんは頭が禿げとるとかで、供えてあるね
じくボーキを両手に持って踊られるのじやが、人に見られるのが恥はずかしいからと暗い所に祭ることにして
いたんや。

子どもたちはこんなわけは知らなんだが、ともかく餅がもらえるいうんで、みんなで家をまわったもんや。何でや知らなんだが、イノコバイちゅうて大人の腕より少し太いめのわら束をもって、それで地面をポーン、ポーン打ってのう。

「イノコ餅もらいましょう。くれん嫁^{かか}ほうらいて、ええ嫁^{かか}もろて、餅もらわ」と、歌というよりわめきながら、家をまわるんや。歌はもとほめたい歌やったそうやが、そんなん忘れてしもうて、餅ほしさだけでこんな歌になったんやろ。その頃は気にもせなんだ。

イノコバイで地面を打つことも、モグラを追うのに役立つとったと後^{あと}で聞いたことがあるがの、昔は昔なりに皆真剣やったんやな。

(小池津義男氏の話及び神戸新聞社「兵庫探検民族編」参考)

田原千歳山城 (田原町)

田原町の東端高森稻荷のまつってある小高い丘は「城ヶ辻」と呼ばれている。そこは千歳山城跡で、最初の城主は平将門の末えいという相馬小七郎秀政と伝えられている。



秀政は嘉吉元年（一四四一）の乱に揖西郡（龍野）水田城主に従い、水田城にこもったが山名の軍勢に攻められ、むなしく落城してしまった。秀政はこの時、善防山城主則繁に従って朝鮮へ逃れたという。千歳山城も山名の軍に降り、秀政に子が多かったため、網引の高田氏から来た養子高田兼清という者が後を継いだ。兼清は赤松の遺臣が南朝に侵入して神霊を奪い赤松再興をはかった時、その一味に加わって活躍し、また応

仁の乱には、別所城の遺児則治や芥田城主世良田氏など加西の赤松にゆかりの武士四十三人と共に、赤松政則に従って山名宗全の軍と戦い、赤松再興のために大きな手柄をたてている。このため政則よりその名の一字をもらい「政久」と改めたと伝えている。しかし、文明七年（一四七五）室津で山名軍と戦った時討死してしまった。

その後千歳山城は、五代目政弘が城を開いて網引に移り、武士をすて農民になったので廃城となったという。

（加西郡誌より）

色は黒ても

昔の人は、そりゃ、よう働きよったんよ。田植が終わると休む間もなく、田の草取りやった。「ほう」いうてな、田の中をそれこそはいまわって、手で草を取るのやが、上からはカンカン照りのオテントサン（太陽）が背中を焼くわ、顔はイネの葉でこすれて汗がしみてがまんならんしな。指はちびてしても血が出るしで、ほんまにつらいつらい仕事やったわな。

みんながまんしてやったんや。働くことが一番大事なことやと、こまい（小さい）時から教えられて育ったでな。

「色は黒ても なすびのよでも 仕事さえすりゃ 嫁にとる」
母親がよう歌うて聞かしてくれたもんやな。

そやから（それだから）、休みがあたるのはどんなにうれしかったかわからへん。田植が終わった時の「サナボリ」や「ハッサク」（陰暦八月一日）、雨やすみ、それに暑い盛りの昼寝なんか、ほんまにありがかった。

「うれしかなしは はっさく休み 昼ねとりあげて 夜なべさす」。

こんなありがたい休みの日も、繁昌では半日しか休まなんだそうな。「繁昌の足半^{あしなか}」いうてな、有名やっ

たんや。

正月やお盆も、休めるといふことだけで、何よりの楽しみやったんやな。祭りには、

「正月三日 盆二日 祭り一日 せがない せがない」

いうて歌ったもんやわ。

(前田今治氏と繁陽町老人会の話より)

わしがまだ若かった時分はな

わしがまだ若かった時分(明治の初め)はな。きょうびのような贅ぜいたく沢は思いもよらんこっちゃった。三度のめしもな。麦の中にはほんの申しわけ程度、米がまぜてあるだけの麦めしでの。麦一升(一・八リットル)に米二合(三・六デシリットル)をまぜるのが普通やった。これを「外二合そとにじう」いうての。たまに麦八合に米二合をまぜる家があると、その家のもんは、「うち内二合うちにいじうや」いうて自慢にしたもんや。

その時分でもな。「半白はんじろ」いうて米と麦を五合ごごうずつまぜためしの家があつてな。それは、大庄屋さんところだけやった。大庄屋さんところは、そりゃえらい格式があつたもんや。

そこへ使いに行く時はな。御門ごもんの前でホオカブリを取つてな。尻からげをはずして、ボンボンと裾を払うてから、ジヨリを脱いでだしになる。そいでジヨリは腰にはさんで、こう、腰を曲げて前屈まえかがみのまま、右手をチョット前に出したかっこうで歩きながら「へえ、ごめんな、ごめんな。」とこまい声で何べんもいうては、勝手の方へまわるんや。そこではじめて、オトコシ(下男)に取りついでもろたもんや。あがりかばちに勝手に腰掛けたらあかんのやで。あがつとから上がれるのは、お代官とボンサンだけやった。

そいでも、この村は結構なもんやった。

あの大きな池のおかげで、日やけの心配はなかつたし、何でもようでけよつた。ふいのお客があつた時はな、「まあ、あの池を一廻りして見てきなはれ、ぎょうさんジャコがおりまっせ」言つてな。お客に池を見にやらすんや。池の土手にはワラビがぎょうさん生えとつたし、ワラビ取りよつてすべつて池にはまろうものなら、ビックリしたお客が土手の棒みたいなもんつかんだら、それがジネンジョやつたてなあんばいや。やれやれ助かつた思つて土手に上がろうとしても、なかなか上られへん。それもそのはず、袂たもとやらふところやらに小ジャコがいっぱい、重とつて上られへんのや。お客が帰つてくるころには、めしはだけとるし、土産みやげはお客が取つて来とる。

ほんにけつこうな村やった。

人かくし（牛居町）

「もオどせ、かアえせ」、チンチン・ドンドン

「もオどせ、かアえせ」、チンチン・ドンドン

鐘や太鼓を先頭にした村の人たちの列が通っています。

村のだけれが、人かくしにあったのです。天狗にさらわれたのです。

ついこの間も、隣り村の男が人かくしにいました。この男はさいわいに、十日もしてからひょっこりと村に帰って来たのですが、その間中自分がどうしていたのか全くわからないというのです。

（前田今治氏の話より）

周遍寺縁起（網引町）

昔、法道仙人がこの山の北の峰に石に写した経文をうずめ、七堂伽藍をそなえた寺としたと伝える。

かつて仙人がこの山に登って四方をながめたところ、南ははるかに碧い海がひろがり、北にはけわしい峰

がかさなりそびえていた。また、峰は花びらのように八つにわかれ、ふもとを深い谷がとりまいて、すべての人々をすくうという仏の広大な誓いに似ていた。これに感じた仙人が寺をいとなんだという。

天正年間、羽柴秀吉の三木城攻撃のときその軍勢に焼かれ、それよりこのかた狐やたぬきのすみかとなっていました。天和の頃、一人の老僧がこれを嘆き再建を願った。所の庄屋高田六郎左衛門がこれを聞いて感動し、再興に努力をかたむけた。

その後また火災などで荒れはて、いまでは無住の小堂が残っているにすぎない。

(北播磨の伝説・吉田省三氏編著より)

網引の八幡さん (網引町)

昔、網引村に八郎左衛門という大工がいた。飾東郡の八王寺へ仕事に行ったとき、その地の神がしばしば夢にあらわれ、

「おまえの帰るところへ行く。」

と告げられた。そこで、八郎左衛門は夜がしらじら明けるのとともに、ご神体を背おって逃げ帰ろうとした。

それを知った村人たちは、大いに怒って追いかけてきた。八郎左衛門はご神体を山中にかくして追手と戦い、血路をひらいてやっと帰ってきた。
この神が網引の八幡さんだと伝える。

(北播磨の伝説・吉田省三氏編著より)

